

More Dissemblers Besides Women における クィアな欲望と再生産

木村 明日香

1. 序

トマス・ミドルトンはシェイクスピアと並び、クィア批評が盛んに行われてきた劇作家である¹⁾。1969年に『チープサイドの貞淑な乙女』(1613年)を編纂したR. B. パーカーが‘The sexual reference is so absolutely pervasive that it gradually ceases to be amusing and we feel like protesting’²⁾と苦言を呈して以来、ミドルトン作品における性的言及の豊富さはたびたび指摘されてきた²⁾。中でも彼が異性愛規範から逸脱したさまざまな欲望を描いたことはよく知られており、2007年にオクスフォード版全集を上梓したゲイリー・テイラーもこう述べている：‘Middleton sexed language, and languaged sex, more comprehensively and creatively than any other writer in English. [...] He invoked “back door” sex, male and female, more often than any of his contemporaries.’³⁾セオドア・ライ

-
- 1) シェイクスピア作品を扱った最近の著書・論集には次のものが挙げられる。Madhavi Menon, ed., *Shakesqueer: A Queer Companion to the Complete Works of Shakespeare* (Durham: Duke University Press, 2011); Anthony Guy Patricia, ed., *Queering the Shakespeare Film: Gender Trouble, Gay Spectatorship, and Male Homoeroticism* (London: Bloomsbury, 2017); Goran Stanivukovic, ed., *Queer Shakespeare: Desire and Sexuality* (London: Bloomsbury, 2017); Melissa E. Sanchez, ed., *Shakespeare and Queer Theory* (London: Bloomsbury, 2019).
 - 2) Thomas Middleton, *A Chaste Maid in Cheapside*, ed. by R. B. Parker (London: Methuen, 1969), pp. xlvii–xlvi.
 - 3) Gary Taylor, ‘Thomas Middleton: Lives and Afterlives’, in Thomas

ンヴァントの先駆的研究はまさにこうした特徴を捉えており、ミドルトンが初期の市民喜劇『ミクルマス開廷期』（1604-7年）において *beggary/buggery* のように商業や金融にまつわる単語に同性愛的含意をもたせた

Middleton, *The Collected Works*, ed. by Gary Taylor and John Lavagnino (Oxford: Clarendon Press, 2007), pp. 25-58 (p. 25). アラン・フレイの先駆的研究がミッシェル・フーコー (Michel Foucault) と共鳴する形で指摘した通り、同性愛 (homosexuality) や異性愛 (heterosexuality)、同性愛者 (the homosexual) や異性愛者 (the heterosexual) といった概念は19世紀末の性科学の産物であり、初期近代イングランドの歴史や文化にそのまま当てはめるのは時代錯誤である。一方、同性間の性的欲望は当時その存在が広く認知されており、またそれはバガー (bagger) やソドマイト (sodomite) などの、より広範な社会的規範からの逸脱を指す用語に必ずしも回収されず、友人関係や家庭 (household) 内の人間関係にも浸透していた。初期近代イングランドにおけるこうした欲望、関係性、実践をどう名指しするのかについては多くの批評家が論じてきたが、本稿ではヴァレリー・トラウブとマリオ・ディガンジーに倣い、特定のセクシュアリティを特定の身体に結びつける近代的な性言説から距離を置くため、「同性愛／同性愛的」という用語を *homosexuality/homosexual* ではなく、*homoeroticism/homoerotic* の訳語として使用する。また注1)のMenonに代表されるように、クィア (queer) という語を性的欲望や実践から切り離し、時系列にとらわれない歴史叙述や学術領域の横断性を含めたあらゆる「逸脱」に無差別に用いる傾向もあるが、本稿ではあくまで異性愛規範 (heteronormativity) に生じる綻びや亀裂の「契機=瞬間」(ジュディス・バトラー (Judith Butler) からの借用) としてこれを用いる。ここでも異性愛規範という概念が近代以降の制度化された同性愛嫌悪と切り離せないという定義上の問題が生じるが、ジェニファー・ヒギンボサムとマーク・ジョンストンが論じるように、初期近代イングランドにおいても結婚と出産による家系の存続という要請が(主に女性の)セクシュアリティの管理や同性愛的欲望の周縁化を招いたことは指摘できる。よって歴史上の差異には留意しつつも、異性愛規範やクィアといった概念を用いることは当時の家父長制社会を語る上でも有用だといえる。Alan Bray, *Homosexuality in Renaissance England*, 2nd edn (New York: Columbia University Press, 1995), Chapters 1 and 2; Valerie Traub, 'The (in)significance of "lesbian" Desire in Early Modern England', in *Erotic Politics: Desire on the Renaissance Stage*, ed. by Susan Zimmerman (London: Routledge, 1992), pp. 150-69 (p. 156); Mario DiGangi, *The Homoerotics of Early Modern Drama* (Cambridge: Cambridge University Press, 1997), pp. 1-23; Jennifer Higginbotham and Mark Albert Johnston, 'Introduction: Queer(ing) Children and Childhood in Early Modern English Drama and Culture', in *Queering Childhood in Early Modern English Drama and Culture*, ed. by Jennifer Higginbotham and Mark Albert Johnston (Cham, Switzerland: Palgrave Macmillan, 2018), pp. 1-30 (pp. 4-5). ジュディス・

double entendre を多用することで、伝統的な階級制度を揺るがす初期資本主義への懸念を示す保守的な態度を表面上はとりながら、観客の潜在的な同性愛的欲望を刺激することで劇の商業的成功を狙うという二重の戦略をとっていることをあきらかにした⁴⁾。ミドルトンが男性間の秘められた／肛門性交の（‘backdoor’）関係に並々ならぬ関心を寄せていたことは、同様の分析をより多くの作品に敷衍したエイドリアン・ブレイマーズによっても示されている⁵⁾。一方、マリオ・ディガンジーは1611年頃の喜劇『女ほど賢い／役立つ者はいない』（*No Wit / Help Like a Woman's*）においてミドルトンが女性間の欲望も前景化していると指摘した⁶⁾。

こうした従来のゲイ・レズビアン批評の問題意識を継承した研究に加え、近年は同性間の絆、欲望、親密性にとどまらないさまざまなトピックが論じられており、その関心は主に、新しい家族の想像／創造、トランスジェンダー、物質文化に向けられている。まずは新しい家族の想像／創造である。シモーヌ・チェスは『チープサイドの貞淑な乙女』において、不妊に悩む夫たちが精力旺盛な男性を妻にあてがひ、自ら寝取られ亭主（cuckold）になることで、再生産という家父長制の要請に応えることに着目し、異性愛規範の要である結婚を脱自然化するのに成功したが、同時に夫たちが新しい「クィアな家族構成」に満足していることも強調している：‘Allwit describes his comfort with the queer family structure, in which his wife sleeps with Sir Walter Whorehound, and carries Whorehound’s babies, but the babies are raised as Allwit’s in a home provided and funded

バトラー、『問題＝物質となる身体—「セックス」の言説的境界について』、佐藤嘉幸監訳、竹村和子・越智博美ほか訳、以文社、2021年、第8章。

- 4) Theodore B. Leinwand, ‘Redeeming Beggary/Buggery in *Michaelmas Term*’, *ELH*, 61.1 (1994), 53-70. 戯曲の推定上演年はすべて Martin Wiggins, in association with Catherine Richardson, *British Drama 1533-1642: A Catalogue*, 9 vols (Oxford: Oxford University Press, 2012-18) を参照。
- 5) Adrian Blamires, ‘Homoeoteric Pleasure and Violence in the Drama of Thomas Middleton’, *Early Modern Literary Studies*, 16.2 (2012), 3 <<http://purl.org/emls/16-2/blammidd.htm>> [accessed 27 January 2022].
- 6) DiGangi, pp. 91-99.

by Whorehound'.⁷⁾ 同じことはもう一人の寝取られ亭主であるサー・オリヴァー・キックス (Sir Oliver Kix) にも当てはまる。彼はタッチウッド・シニア (Touchwood Senior) の働きで妻が無事に身ごとると、400 ポンドの大金を与えるだけでなく同居を勧めるのである: 'I have purse, and bed, and board for you' (5.4.78)⁸⁾。チェスが別のところでも論じているように⁹⁾、性的不能 (impotence) や性的欲望の欠如 (asexuality) も異性愛規範から逸脱する欲望の一形態とみなしうるのであれば、彼らが築く三人の夫婦関係は (それが婚外交渉を内包する点も含めて) クィアな欲望に基づく新しい家族形態だといえる。これはリー・エーデルマンが2004年の著書において、大文字の子供 (the Child) を再生産と未来を志向する強制的異性愛の象徴とみなし、クィアな欲望をそれに対抗する「死の欲動」(the Death Drive) と位置づけたことへの有効な反駁にもなっている¹⁰⁾。クィアな欲望の行きつく先はデッドエンドではなく、ジェンダー規範に縛られない新たな人間関係と絆の構築であり、それは異性愛結婚をパロディ化しながらオルタナティブな家族像を提唱するのである。

次にトランスジェンダーは、2019年に *The Journal for Early Modern Cultural Studies* で特集が組まれて以降、初期近代演劇の新たな切り口として注目を集めてきた¹¹⁾。トランス*研究の第一人者であるスーザン・ス

-
- 7) Simone Chess, 'Contented Cuckolds: Infertility and Queer Reproductive Practice in Middleton's *A Chaste Maid in Cheapside* and Machiavelli's *Mandragola*', in *Performing Disability in Early Modern English Drama*, ed. by Leslie C. Dunn (Cham, Switzerland: Palgrave Macmillan, 2020), pp. 117-40 (p. 137).
 - 8) Thomas Middleton, *A Chaste Maid in Cheapside*, ed. by Linda Woodbridge, in *Collected Works*, pp. 907-58.
 - 9) Simone Chess, 'Asexuality, Queer Chastity, and Adolescence in Early Modern Literature', in Higginbotham and Johnston, pp. 31-55.
 - 10) Lee Edelman, *No Future: Queer Theory and the Death Drive* (Durham: Duke University Press, 2004).
 - 11) Simone Chess, Colby Gordon, Will Fisher, 'Introduction: Early Modern Trans Studies', *The Journal for Early Modern Cultural Studies*, 19.4 (2019), 1-25; Simone Chess, *Male-to-Female Crossdressing in Early Modern English*

トライカーによれば、トランスジェンダーは「誕生時に振り分けられたジェンダーから離れ、文化がジェンダーを定義し包摂するため構築した境界を越える（トランスする）人々」と定義され、ジェンダーの身体化（embodiment）のさまざまな様相を捉えるため、多方向のベクトルと無限の広がりを示すアスタリスク（*）を用いて表記されることも多い¹²⁾。またトランス*研究はジュディス・バトラー（Judith Butler）の仕事に大きな影響を受けている¹³⁾。バトラーは『ジェンダー・トラブル』（*Gender Trouble*）においてジェンダーのみならずセックスも「社会的に構築されたもの」であり、「セックスは、つねにすでにジェンダーなのだ」と述べ、特にミシェル・フーコー（Michel Foucault）とモニク・ウィティッグ（Monique Wittig）を批判的に継承しながら、セックスとジェンダーを生物学的事実と社会的構築物として区別する従来のフェミニズムに一石を投じたが¹⁴⁾、『問題^タ物質となる身体』（*Bodies that Matter*）ではこれをさらに発展させ、身体^{パフォーマティヴィティ}の物質性をより具体的にジェンダーの行為^{パフォーマティヴィティ}遂行性に結びつけている。

「セックス」は、身体の単純な事実でも、身体の静的条件でもなく、統制的規範が「セックス」を物質化し、この物質化が統制的規範の強制的反覆を通じて達成されるような過程である。反覆が必要だということは、物質化が決して完成しないという徴しであり、また、この物質化を強制する規範に身体が完全には従わないという徴しである。ま

Literature: Gender, Performance, and Queer Relations (London: Routledge, 2016), pp. 14-19. 本稿では「初期近代」(the early modern period) をロンドンに公衆劇場が誕生した 1570 年代から 1642 年の清教徒革命勃発による劇場閉鎖までを指す限定的な意味で用いる。

- 12) Susan Stryker, *Transgender History: The Roots of Today's Revolution*, revised edn. (New York: Seal Press, 2017), p. 1. 本稿では理論系の文献からの引用には拙訳を示し、作品や作品批評からの引用は基本的に原文を用いる。
- 13) Stryker, pp. 162-64.
- 14) ジュディス・バトラー、『ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱』、竹村和子訳、青土社、2017年、28-29頁。

さしく、こうした過程によって切り開かれる不安定性、すなわち再物質化の可能性こそが、統制的法の力を自分自身と反対に振り向かせることができ、そうした統制的法そのもののヘゲモニー的な力を疑問に付す再分節化を引き起こすような領域を徴し付けるのである¹⁵⁾。

生殖を究極目標とおく異性愛的命令を強化する言説が、性的実践等を通じて繰り返し引用されることで、ジェンダーとセックスは物質化され、規範が「正常」とみなす身体が生産されるが、この生産は常に進行中の過程であり、引用の失敗や意図的なずらしによって再物質化が可能になるというバトラーの主張は、しばしば流動的な (fluid) と形容されるトランスジェンダーの人々の複雑な性的自認や体験を記述する上での一つの参照点となってきた。ミドルトン研究では先述した特集において、マジョリー・ルブライトがトマス・デッカーとの共作『どなる女』(1611年)を取り上げ、従来のフェミニズム批評では男装のヒロインとして語られてきた主人公のモル (Moll) をジェンダー・ノンコーフィミング (gender non-conforming) な Moll | Jack として捉え直し、彼ら (they) のジェンダーを記述しきれずに増殖する語彙と意味作用に注目することで、本作をトランス*研究の観点から再解釈している¹⁶⁾。ルブライトの研究は、ジェフリー・マステンが「歴史的距離のある文化におけるセックスとジェンダーの研究は必然的に文献学的調査 (a *philological* investigation) となる」として、初期近代にクィアな欲望や体験と関わりのあった語句の語源、流通、変容をたどるよう提唱したクィア・フィロロジー (queer philology) と、こうした初期近代の語句を十分な歴史的・言語的検証を経ずに現代の語句や概念に置換したり、現代人にはその全貌が決して明かされることのない

15) バトラー、『問題=物質となる身体』、4頁。

16) Marjorie Rubright, 'Transgender Capacity in Thomas Dekker and Thomas Middleton's *The Roaring Girl* (1611)', *The Journal for Early Modern Cultural Studies*, 19.4 (2019), 45-74.

言葉の多義性を単一的な意味に集約しようとする研究手法に異議を唱えたヴァレリー・トラウブへの応答となっているが、ルブライトが「呼びかけ」に注目したことはバトラーの仕事とも響き合う¹⁷⁾。バトラーによれば、ルイ・アルチュセール (Louis Pierre Althusser) は呼びかけを、権力が呼びかけの対象を主体化＝服従化する、あるいは承認すると同時に処罰する「一方的な行為」とみなしており、「呼びかけの法が生産するかもしれない不服従の射程を考慮していない」¹⁸⁾。サラ・サリーの言葉を借りれば、呼びかけに応じないこと、画一的で「首尾一貫したアイデンティティ」をもつ主体としての地位を拒否することには「攪乱的な潜在力」があり¹⁹⁾、これは Moll | Jack がそのジェンダーを固定化しようとするさまざまな呼びかけに応じず、最後まで拘摸として社会的秩序の外部にとどまる選択をすることと共鳴するのである。

最後に「物質文化」は2000年前後の物質的転回 (the material turn) 以降、初期近代文学・文化研究の主要なアプローチの一つとして発展してきた。1980、90年代の新歴史主義がポスト構造主義、特に脱構築の理論を応用した文学研究の抽象性を批判し、歴史研究への回帰を呼びかけながら、従来型の文学テクストを特権化してきたことへの反省から、家財などのモノを含めたより広範な文化的産物に注目が集まったのである²⁰⁾。中でも衣装は劇場における異性装との関わりから注目され、衣装が規範的なジェンダーを物質化する一方、再物質化の契機もはらむことはたびたび論じられてきた²¹⁾。ジェイムズ・ブルムリーの近年の単著はこうした問題意識

17) Jeffrey Masten, *Queer Philologies: Sex, Language, and Affect in Shakespeare's Time* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2016). Kindle. His emphasis; Valerie Traub, *Thinking Sex with the Early Moderns* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2016), pp. 207–15.

18) バトラー、『問題＝物質となる身体』、162頁、強調原文。

19) サラ・サリー、『ジュディス・バトラー』、竹村和子他訳、青土社、2005年、225頁。

20) James A. Knapp, 'Beyond Materiality in Shakespeare Studies', *Literature Compass*, 11.10 (2014), 677–90 (pp. 677–78).

21) 代表例として以下が挙げられる。Ann Rosalind Jones and Peter Stallybrass,

を継承し、『ミクルマス開廷期』などの市民喜劇をクィア・スタイル (queer style) に注目し再読している。クィア・スタイルとは、‘forms of masculinity that were grounded in superficiality, inauthenticity, affectation, and the display of the extravagantly clothed body’ と定義され、当時の規範的な男性性からの逸脱を意味するが、特に身分が高い男性の場合、贅沢な衣装に身を包むことはむしろ男性性の表われとみなされることもあったため、真の男性性と見せかけの男性性の区別は厳密にはつかず、クィア・スタイルには男性性を奨励する異性愛規範の内部に亀裂を入れる潜在的な力があった²²⁾。市民喜劇ではしばしば地方から上京した者が自分の階級にふさわしくない贅沢な衣装をまとい、新たなアイデンティティや人間関係を構築するさまが描かれるが、クィア・スタイルは彼らをさまざまな非=規範的欲望のネットワークに巻き込んでいく。衣装の着脱によるジェンダーやセクシュアリティの身体化はいわゆる生物学的性 (sex) の非本質性をあきらかにし、異性愛規範のもとでは想像されなかった、あるいは隠蔽されていたさまざまな欲望や関係性を再=現前させるのである。プロムリー自身が強調するように、彼がクィアな欲望を ‘worldmaking’、すなわちオルタナティブな世界を想像／創造する力とみなしていることは重要である。チェスと同様、プロムリーもこうした欲望を「死の欲動」ではなく、生殖や血縁に縛られない親密な関係性を構築するものとして語るのである。

本稿では近年のこうした傾向をふまえ、ミドルトンの喜劇『女のほかに偽善者がいっぱい』 (*More Dissemblers Besides Women*、以下『偽善者』) におけるクィアな欲望と再生産について論じる。本作の推定上演年につい

Renaissance Clothing and the Materials of Memory (Cambridge: Cambridge University Press, 2000); Will Fisher, *Materializing Gender in Early Modern English Literature and Culture* (Cambridge: Cambridge University Press, 2006).

22) James M. Bromley, *Clothing and Queer Style in Early Modern English Drama* (Oxford: Oxford University Press, 2021), p. 5.

ては諸説あるが、マーティン・ウィギンズの最新の研究によれば1621～22年頃に国王一座によってブラックフライアーズ座とグローブ座で上演された²³⁾。1620年代前半にはミドルトンの代表作である『女よ、女に心せよ』(*Women, Beware Women*)、『チェンジリング』(*The Changeling*)、『チェス・ゲーム』(*A Game at Chess*)が上演されており、宮廷に渦巻く欲望と策謀、カトリック司祭の偽善といったテーマは『偽善者』にも見受けられるが、あまり注目されない作品である²⁴⁾。今回本作を取り上げるのは、ミドルトンがラクタンシオ(Lactantio)と小姓(the Page)のカップ

23) ウィギンズが詳しく論じているように、本作の推定上演年については1619年と1614年が挙げられてきた。このうち説得力がある1614年説にのみ言及すると、これを唱えるオクスフォード全集の編者ジョン・ジュエットはその根拠として、1612-14年頃初演のジョン・ウェブスター作『モルフィ公爵夫人』との類似性に加え、本作で小姓が披露する二つの歌について次の仮説を示している。一つ目の歌は1614年1月4日に宮廷上演された『キューピッドの仮面劇』(*The Masque of Cupids*)で初披露された可能性が高く(本文は現存しない)、本作で再利用された。二つ目の歌は本作で初披露されたのち、1615-17年初演の『未亡人』(*The Widow*)で再利用された。要するに、二つの歌はそれぞれ別のミドルトン作品にも出てくるため、これらの作品と同時期に上演されたと考えるのが妥当という議論である。一方、ウィギンズが指摘するように、『モルフィ公爵夫人』は何度も再演されており、ミドルトンが再演に影響を受けて本作を執筆した可能性は十分にある(実際、ミドルトンがウェブスターに影響を受けたと考えられる他の作品は1620年代に上演されている)。また本作においてオーレリア(Aurelia)が使用する黒塗りの化粧はすぐに落とせる新製品だが、これが発明されたのは1621年である。本稿ではウィギンズの1621-22年説を採用するが、後半で述べる『モルフィ公爵夫人』との関連性についてはどちらの年代説を採っても成立することを申し添えておく。Wiggins, vol. 7, pp. 360-61; John Jowett, 'More Dissemblers Besides Women', in *Thomas Middleton and Early Modern Contextual Culture: A Companion to the Collected Works*, ed. by Gary Taylor and John Lavagnino (Oxford: Clarendon Press, 2007), pp. 378-79.

24) 後述するツォク、アンドゼジェフスキー以外で本作に特化した批評としては、公爵夫人の貞節の誓いをめぐる宗教的背景を論じたゲラーと、『尺には尺』との影響関係を論じたブッコラが挙げられる。Lila Geller, 'Widows' Vows and More Dissemblers Besides Women', *Medieval and Renaissance Drama in England*, 5 (1991), 287-308; Regina Buccola, "Some Woman is the Father": Shakespeare, Middleton, and the Criss-Crossed Composition of *Measure for Measure* and *More Dissemblers Besides Women*', *Medieval and Renaissance Drama in England*, 28 (2015), 86-109.

ルを通じて、複数のクィアな契機^{モーメント}=瞬間を提示していると考えられるためである。イヴ・セジウィックによれば、クィアとは「誰かのジェンダー、誰かのセクシュアリティを構成する複数の要素が一枚岩を示すように作られていない（または作られ得ない）場合の、意味の可能性、裂け目、重複、不協和、共鳴、誤り、過剰という開かれた網の目」であり、バトラーはジェンダーが行為遂行的に身体化／物質化されていく過程でこうした「網の目」が発現する契機^{モーメント}=瞬間を‘moment’と呼んでいる²⁵⁾。小姓は男装のヒロインで、彼女とラクタンシオは大団円で結婚し子供も授かるが、この一見規範的な異性愛関係にはこうしたクィアな契機^{モーメント}が潜んでいる。まずミドルトン^{ベイジ}はジェンダー、セックスを規定するはずの言語や衣服がそれらを攪乱する瞬間を示すことで、新たな意味づけの可能性に開かれた身体を想像しており、この特徴はラクタンシオと小姓^{ベイジ}両方の表象に認められる。次に本作では異性愛規範から逸脱した欲望が繰り返し描かれるが、特に身体化されるジェンダーが流動的なラクタンシオと小姓^{ベイジ}においては、異性愛とも同性愛とも名付けられないクィアな欲望が発動している。最後に、本作は初期近代演劇で唯一、妊娠・出産する小姓を描いており、これは近年増加しているトランス男性の妊娠・出産とも響き合い、「女性の」出産という言葉に疑問を投げかけている。まずは簡単に本作のあらすじを紹介した後、これらの問題を順次論じていく。

2. あらすじ

ミラノ公爵夫人 (the Duchess of Milan) は7年前に死んだ夫に貞節の誓いを立てた寡婦で、貞節を守るため宮廷に自らを監禁している。彼女が顔を合わせるのは侍女のシーリア (Celia) と、夫の元腹心で、彼女の誓いの監視役を務める枢機卿 (the Cardinal) のみである。枢機卿は厳格な独身・禁欲主義者で、公爵夫人の貞節を崇め奉り、自分の甥であるラクタ

25) Eve Kosofsky Sedgwick, *Tendencies* (Durham: Duke University Press, 1993), p. 8; バトラー、『問題=物質となる身体』、第8章。

ンシオの貞節にも固執している。

だがある日、公爵夫人はミラノの戦勝を祝う凱旋式で將軍アンドルジオ (Andrugio) に一目ぼれしてしまう。彼女は貞節の誓いを体よく反故にし、アンドルジオとの再婚を実現するため、枢機卿の甥であるラクタンシオ (Lactantio) に恋したふりをする。枢機卿は公爵夫人の心変わりを叱責し、甥の貞節にも執心をみせるが、結局公爵夫人との有利な縁談に目がくらみ、再婚を後押しし始める。

一方、ラクタンシオは叔父である枢機卿の前では貞節を装っているが、実際には性的奔放な若者である。彼は恋人 (the Page) に小姓の格好をさせ、一緒に枢機卿の家に暮らしているが、彼女を妊娠させてしまう。さらにはアンドルジオの恋人・オーレリア (Aurelia) をもたらしこみ、自分に恋していると噂される公爵夫人も口説き始める。公爵夫人はラクタンシオを利用して、アンドルジオを宮廷に監禁するのに成功する。

こうしてもつれた人間関係は、小姓の出産でやや強引に解消される。小姓は枢機卿の推薦で公爵夫人に仕えるが、歌とダンスのレッスンの最中に陣痛を催し、出産してしまうのである。小姓の正体とラクタンシオの偽善が暴かれると枢機卿は激昂するが、自らの偽善も認めることになる。一方、公爵夫人はオーレリアの存在を知り、再婚を諦め、アンドルジオは浮気をした不実な恋人を許す。こうして全員の偽りの装い (dissemblance) が暴かれた後、公爵夫人は再び貞節の誓いを立て、ラクタンシオと小姓、アンドルジオとオーレリアが結婚する。

3. 〈クィアな子供〉としてのラクタンシオ

まずはラクタンシオの欲望が異性愛から滑るクィアな契機 = 瞬間を記述していく。先述の通り、彼は厳格な独身・禁欲主義者である枢機卿の甥で、貞節を装っているが、実際には激しい欲望と精力の持ち主である。浮気相手であるオーレリアは、彼を恋人のアンドルジオと比較しながらこう述べている：'I have chose a stuff / Will wear out two of him [Andrugio],

and one finer too' (2.3.95-96)²⁶⁾。ラクタンシオの欲望は縦横無尽にかけめぐり、小姓、オーレリア、公爵夫人とあらゆる女性に向けられるが、一見異性愛的なその欲望はしばしばクィアなものとしてあらわれる。彼には女性に男装させる癖が見受けられるのである。表向きの理由は、家主の枢機卿が女性嫌悪者で、女性に家の敷居をまたがせることを拒んでいるためだが (1.1.49-52)、ラクタンシオはあきらかにこのロールプレイを楽しんでいる。オーレリアがローマから来た紳士に扮して登場すると、彼はこう戯れる。

Then thus begins our conference : I arrest thee
In Cupid's name. Deliver up your weapon.
It is not for your wearing, Venus knows it.
Here's a fit thing indeed, nay, hangers and all!
Away with 'em, out upon 'em, things of trouble,
And out of use with you. (1.2.171-76)

ラクタンシオは剣 ('weapon') や剣差し ('hangers') を取り払うので、目当ては男装の下に隠された女性の身体なのかもしれない。しかしオクスフォード全集で本作を編集したジョン・ジュエットの注釈にあるように、剣はペニス、剣差しは睾丸の隠喩であり、ラクタンシオはそれを 'a fit thing' と呼んでいる²⁷⁾。オーレリアを演じるのが少年俳優だったことをふまえても、ラクタンシオの欲望は異性愛とも同性愛ともつかないクィアなものだといえるだろう。'It is not for your wearing' というセリフからは、成人俳優が男性性の象徴である剣に手を出す少年俳優をたしなめ、去勢し、女性化するという図式もみえてくる。

26) すべて引用は、Thomas Middleton, *More Dissemblers Besides Women*, ed. by John Jowett, in *Collected Works*, pp. 1034-73. による。

27) Middleton, *More Dissemblers*, p. 1041.

一方、ミドルトンはラクタンシオにも少年俳優と同じ女性性を与えている。ラクタンシオ (Lactantio) の名前に 'lack' が含まれることは、『どなる女』のしゃれ男ラクストン (Laxton (lack-stone)) の名前と響き合い、欠如を暗示する。実際、彼は純潔に固執する家父長に支配される点では極めて女性的であり、頬を赤らめるなど、処女の特性とも結びつけられている：'I've seen him blush / When but a maid was named' (1.2.88-89)。彼の貞節も 'that bashful maiden virtue' (3.1.191) と表現される。ラクタンシオが叔父の前で貞節を装うのは子供のいない枢機卿の遺産を狙っているためだが (1.1. 59-60)、二人の関係性には当時の後見人制度 (wardship) を想起させるところがある。後見人制度はもともと家臣が未成年の子供を残して死亡したさい、主君が後見人 (guardian) となり、被後見人 (ward) が成人するまで封土の管理と養育を担うものだったが、チューダー朝の国王たちが王室収入を上げるため利用し始め、ジェイムズ一世の時代には後見人の権利の売買が横行し、腐敗の温床として非難された²⁸⁾。後見人は親戚が務めることもあり、ミドルトンは『女よ、女に心せよ』において、若者 (the Ward) と叔父のガエルディアーノ (Guardiano) の表象を通じてこの制度を揶揄している²⁹⁾。B. J. ソコルとメアリー・ソコルによれば、成人年齢は男性が21歳、女性が16歳だったが、結婚の取り決めをするのも後見人であり、被後見人はしばしば成熟した身体をもちながら、法律上は子供とみなされセクシュアリティを管理されていた³⁰⁾。同様の '[l]egal infancy' は少年俳優を含む市民階級の徒弟たちにも確認できる³¹⁾。彼らは14歳から21歳までのあいだにギルドのメンバーである親方と年季奉公契

28) B. J. Sokol and Mary Sokol, *Shakespeare, Law, and Marriage* (Cambridge : Cambridge University Press, 2003), pp. 43-44 ; Albert H. Tricomi, 'Middleton's *Women Beware Women* as Anticourt Drama', *Modern Language Studies*, 19.2 (1989), 65-77 (p. 71).

29) Tricomi, pp. 70-72 ; Thomas Middleton, *Women, Beware Women : A Tragedy*, ed. by John Jowett, in *Collected Works*, pp. 1488-1541 (p. 1489).

30) Sokol and Sokol, p. 44.

31) Sokol and Sokol, p. 43.

約を結び、少なくとも7年間を親方の住居兼職場で過ごしたが、結婚ならびに婚外交渉は固く禁じられていた³²⁾。カトリック司祭の監視下におかれるラクタンシオはかなり極端な例ではあるが、当時の男性の多くが経験したことがある女性的な立場を体現していたのである。

しかしラクタンシオは早く厳格な叔父の家を出て、名実ともに大人の男になりたいとは思っておらず、むしろ結婚と生殖を可能なかぎり避けようとする。彼は妊娠した小姓^{ベイジ}から結婚を迫られると、こう吐き捨てる。

I'll ne'er keep such a piece of touchwood again,
An I were rid of thee once. Well fare those
That never shamed their master! I have had such,
And I may live to see the time again,
I do not doubt on't. (3.1.4-8)

ここでラクタンシオはかつて自分に仕えていた小姓たちに言及するが、彼らのジェンダーは一見定かではない。彼らも小姓^{ベイジ}と同じように男装した女性で、たまたま妊娠しなかったのか。あるいは彼らは少年で、妊娠しようがなかったのだろうか。ラクタンシオの召使であるドンドーロ(Dondolo)も昔の小姓たちにふれている。ドンドーロは昔の小姓たちと異なり、小姓^{ベイジ}があまりによそよそしく傲慢だと不満を述べるのである。

Yet the proud scornful ape [the Page], when all the lodgings
Were taken up with strangers th'other night,
He would not suffer me to come to bed to him,

32) David Kathman, 'Grocers, Goldsmiths, and Drapers: Freeman and Apprentices in the Elizabethan Theater', *Shakespeare Quarterly*, 55.1 (2004), 1-49 (pp. 3-4); Steve Rappaport, *Worlds within Worlds: Structures of Life in Sixteenth-Century London* (Cambridge: Cambridge University Press, 1989), p. 234.

But kicked and pricked and pinched me like an urchin.

[. . .]

There's no good fellowship in this dandiprat,

This dive-dapper, as is in other pages.

They'd go a-swimming with me familiarly

I'th' heat of summer, and clap what-you-call-'ems ;

But I could never get that little monkey

Yet to put off his breeches. (3.1.83-97)

昔の小姓たちはズボンを脱ぐことを厭わなかったようなので、やはり少年だったのだろうか。ドンドーロは彼らが自分と喜んでベッドを共有し、裸で水遊びをしたと述べており、ここにはホモソーシャルな同胞意識とホモエロティックな欲望の連続性が認められる。昔の小姓である少年たちは、妊娠して主人であるラクタンシオを困らせることもなく、召使いであるドンドーロにも惜しみなく快樂を与えた。これは結婚を約束したラクタンシオとのみベッドを共有し、妊娠してしまった小^{ペイジ}姓とは大違いというわけである。マーク・ジョンストンは『十二夜』（1601-2年）を含む当時の文学作品において、身分の高い女性がしばしば性的に未熟な少年に惹かれるのは、まさにこの生殖能力の欠如のためだと論じている。女性たちが求めるのは自分を妊娠させない男性器であり、少年はこうした夢想を満たしたのである³³⁾。これを敷衍するならば、ラクタンシオの昔の小姓たちの魅力もまさしく快樂を与えながら、妊娠しない能力にあったといえるだろう。

このようにラクタンシオが優れた生殖能力を異性愛結婚と結びつかない快樂に費やすことは、キャサリン・ストックトンが提唱したクィアナ子供クィアナの水平的成長と照らし合わせると興味深い。クィアナ子供（'the queer child'）はセジウィックやマイケル・ムーンが着目したプロトゲイの子供

33) Mark Albert Johnston, 'Shakespeare's *Twelfth Night* and the Fertile Infertility of Eroticized Early Modern Boys', *Modern Philology*, 114.3 (2017), 573-600.

（‘the protogay child’）を發展させた概念で、彼らが実在の同性愛者の子供時代を記述し、同性愛者と同定する以前のプロトゲイの子供を可視化したのに対し、ストックトンがプロトゲイの子供が同性愛者になるという時系列を覆し、プロトゲイの子供は自らをゲイと同定した「後」に生まれるとした（‘backward birth’）³⁴。この発想の利点はあらゆる子供がゲイになる可能性を秘めたクィアな子供だと主張できる点にあるが、さらにストックトンはこうした子供の水平的成長（‘sideways growth’）を次のように記述する。

子供の漸進的成長や自己の発露は、上方向の垂直運動（‘growing up’）として執拗に語られてきた。身長が伸び切り、結婚し、働き、出産し、子供性を喪失することだとされてきた。遅延は（中略）成長と同じく厄介な概念である。両者はわたしたちを水平性——横または後方への広がり——の概念へといざなうのである³⁵。

ストックトンによれば、異性愛規範は成長を常に ‘growing up’ として語り、労働、結婚、出産という直線的な時間を生きることを正常とみなしてきたが、クィアな子供はこれを遅延し続け、水平方向に成長する。彼らの「活力、快樂、生命力、感情／動力（‘(e) motion’）は再生産と結びつかない〔絆の〕結合や広がり」を「往復」し続けるのである³⁶。ラクタンシオは夫や父としての家父長的義務から自由な子供の立場にとどまり、次から次へと異なる性的対象を渡り歩くが、そのありようはこうしたクィアな子供の水平的成長とも共鳴するようにみえるのである。

34) Kathryn Bond Stockton, *The Queer Child: Or Growing Sideways in the Twentieth Century* (Durham: Duke University Press, 2009), pp. 2-10; Sedgwick, pp. 154-64; Michael Moon, *A Small Boy and Others: Imitation and Initiation in American Culture from Henry James to Andy Warhol* (Durham: Duke University Press, 1998). Kindle.

35) Stockton, p. 4.

36) Stockton, p. 13.

4. ^{ペイジ}小姓の流動的なジェンダー

一方、妊娠によって直線的・目的論的な時間を生きることを余儀なくされるのが^{ペイジ}小姓である。彼女はラクタンシオの結婚の口約束にだまされ、故郷を捨ててミラノにやってきたが、枢機卿の目を盗んで性的奉仕をさせられている。リサ・ジャーディーンとスティーヴン・オーゲルは当時のエロティシズムが権力関係に依拠していたとして、召使いの少年や少年俳優の性的魅力を社会的・経済的従属性から説明したが、主人の恋人に搾取される^{ペイジ}小姓はまさにこうしたエロティックな存在だったといえる³⁷⁾。ミドルトンがこれを認識していたことは、1604年出版の諷刺詩『閻魔帳』において‘the race of lusty vaulting gallants’ (l.331) の典型的な従者として‘an English page which fills us the place of an ingle’ (ll.338-39) を挙げていることから明らかだろう³⁸⁾。さらに重要なのが、^{ペイジ}小姓が身体化する流動的なジェンダーである。^{ペイジ}小姓は妊娠した紳士階級の女性と、未熟な召使の少年という、ジェンダー、セックス、階級、年齢すべてにおいて相反する特徴を兼ね備え、その魅力は見る者によって万華鏡のように変化する。枢機卿はラクタンシオにこう述べる。

The prettiest servant

That ever man was blest with! 'Tis so meeke,
So good and gentle, 'twas the best alms-deed
That e'er you did to keep him. I have oft took him
Weeping alone, poor boy, at the remembrance
Of his lost friends, which, as he says, the sea

37) Lisa Jardine, ‘Twins and Travesties : Gender, Dependency and Sexual Availability in *Twelfth Night*’, in *Erotic Politics : Desire on the Renaissance Stage*, ed. by Susan Zimmerman (London : Routledge, 1992), pp. 27-38 ; Stephen Orgel, *Impersonations : The Performance of Gender in Shakespeare’s England* (Cambridge : Cambridge University Press, 1996), Chapter 4.

38) Thomas Middleton, *The Black Book*, ed. by G.B. Shand, in *Collected Works*, pp. 204-18.

Swallowed with all their substance. (1.2.149-55、強調筆者)

枢機卿にとっての小姓^{ペイジ}は哀れな孤児で、神の恩寵をもたらす善良な存在である。またそのあどけなさは彼の潜在的な幼児性愛も満たしている。一方、枢機卿が無垢のあかしとして挙げる涙は、ゲイル・パスターが述べるように、母乳、経血、子供を生みだす女 ('leaky vessels') の特徴でもある³⁹⁾。

小姓^{ペイジ}を 'the prettiest servant' と褒めそやす枢機卿とは対照的に、公爵夫人と侍女のシーリアにとっての小姓^{ペイジ}の魅力はかわいらしさや女性性ではなく、立派な男性に成長する資質にある。小姓^{ペイジ}が宮廷にやってくると、公爵夫人はこう述べる。

O, here's the pretty boy he [the Cardinal] preferred to me.

I never saw a meeker, gentler youth

Yet made for man's beginning. (4.3.61-63、強調筆者)

[. . .]

It shall be my care to have him well brought up

As a youth apt for good things. (4.3.75-76)

公爵夫人は枢機卿と同じ形容詞である 'meek' と 'gentle' を否定的に用いて、小姓^{ペイジ}が女性を喜ばせる「良いこと」 ('good things') ができる立派な若者に育つよう、歌とダンスのレッスンを手配する。公爵夫人がレッスンの様子を尋ねると、シーリアも同様の反応をする。

A pretty, womanish, faint, sprawling voice, madam ;

[. . .]

39) Gail Kern Paster, *The Body Embarrassed: Drama and the Disciplines of Shame in Early Modern England* (New York: Cornell University Press, 1993), p. 39.

He is well made for dancing, thick i'th' chest, madam.

He will turn long and strongly. (4.3.79-85、強調筆者)

ベイジ
小姓の女性性はこれから芽生える男性性を期待させるもので、'long and strongly' は男性的な精力を暗示する。一方、ここでも小姓の胸の厚さ (ベイジ
'thick i'th' chest') は男らしさと、妊婦の胸の張りの両方を示している⁴⁰⁾。

中でも革新的な考えを述べるのがドンドーロである。彼は小姓への欲望 (ベイジ
を同性愛的にも異性愛的にも語るが、むしろそのジェンダーの流動性に惹かれて
いるようにみえる。

[. . .] 'tis pity that thou wast ever bred to be thrust through a pair of canions ; thou wouldst have made a pretty, foolish waiting-woman, but for one thing. (1.4.59-62)

ここでドンドーロが性別を生まれてくるもの (born) ではなく育つもの (bred) として語っているのは重要である。小姓はたまたまキャニオンズ (男性用ズボンの細い部分) を履いてしまったが、ファージンゲルを履いていれば侍女になっていたかもしれないのである。

5. ベイジ 小姓の妊娠・出産

ではこうした登場人物の妊娠・出産を私たちはどう読むべきだろうか。それは一見、小姓の女性としてのジェンダーとセックスを固定化しているようにみえる。またラクタンシオについても結婚・生殖を回避してきた欲望を押しとどめ、水平的なクィアな成長を垂直に矯正しているようにみえる。実際、多くの批評家が小姓の出産をジェンダーの混乱を解消するもの

40) Alicia Andrzejewski, 'The Then and There of Transmasculine Pregnancy', *SYNOPSIS*, 10 June 2018, <<https://medicalhealthhumanities.com/2018/06/10/the-then-and-there-of-transmasculine-pregnancy/>> [accessed 2 February 2022].

として論じてきた。ジュエットは小姓^{ペイジ}の出産シーンが引き起こす‘a dizzying collapse of apparent gender identity’にふれながらも、最終的には‘the return to a safely gendered and moralized reality’が実現されると述べている⁴¹⁾。アマンダ・ツォクは小姓^{ペイジ}が経験する苦痛や不安を当時の女性が妊娠中に書いた手記と比較し、女性たちが御しがたい妊娠した身体を持ちながら、それを母としての肯定的な自己表象に閉じ込めたのと同じように、小姓^{ペイジ}の攪乱的で分類不可能な身体も出産後、‘a paragon of silent and sympathetic motherhood’に変換されると述べている⁴²⁾。だがはたしてミドルトンはクィアな欲望を規範的異性愛に回収しているのだろうか。ジェンダーとセックスはふたたび二分化されてしまったのか。

アリシア・アンドゼジェフスキーはトランスマスキュリン (transmasculine) の人々の妊娠・出産を扱った記事で本作に言及し、新しい視座を提供してくれている。彼女によれば、小姓^{ペイジ}が周囲の人々やコミュニティからの支援を得られずに出産に至るさまは、現代社会でトランスマスキュリンの人々が直面している問題と響き合うという⁴³⁾。2021年刊行の

41) Middleton, *More Dissemblers*, p. 1037.

42) Amanda Zoch, ‘Maternal Revision in Middleton’s *More Dissemblers Besides Women*’, in *Stage Matters: Props, Bodies, and Space in Shakespearean Performance* (London: Fairleigh Dickinson University Press, 2018), pp. 159–70 (p. 164).

43) Andrzejewski. オクスフォード英語辞典は transmasculine を次のように定義する: ‘Designating a person whose birth sex was female but whose gender identity is aligned with or characterized in some way by masculinity; of or relating to such a person’ (‘transmasculine, adj.’)。一方、transman は ‘A female-to-male transgender or transsexual person’ (‘transman, n.’) と定義し、男性というジェンダーやセックスに自らを同定する度合いによって二つを区別しているが、transmasculine が transman を含む包括的用語として使われる例もある。たとえばサリ・レズナーらは transmasculine を次のように定義する: ‘We use the term *transmasculine* as an inclusive umbrella term that refers to transgender people assigned a female sex at birth and who identify on the masculine spectrum, including as a man of transgender experience, transgender man, transman, female-to-male (FTM), genderqueer, or “other” masculine identity’ (p. 293)。アンドゼジェフスキーの用法はこれに近いが、同じく本文で引用している *International Journal of Transgender Health* の論説

International Journal of Transgender Health によれば、男性、トランス／マスキュリンの人々、ノンバイナリーの人々による妊娠・出産の事例は年々増えており、インターネット上の支援用ウェブサイトには約 5000 名の登録者がいるほか、オーストラリアでは 2013 年 7 月 1 日から 2020 年 6 月 30 日までの期間に「246 名の男性」が自然分娩ないし帝王切開で出産した⁴⁴⁾。ここではアンドゼジェフスキーの要点であるトランスジェンダーの人々の妊娠・出産に関わる支援の問題や、初期近代演劇の登場人物である小姓をどの程度トランスジェンダーとみなしうるかといった点には立ち入らないが、出産イコール女性という等式にとらわれなければ、小姓の出産もラディカルに読み直せるのではないか。

実際、ジェニファー・ヒギンボサムとマーク・ジョンストンが述べるように、初期近代はさまざまな形で男性による出産を想像した時代だった。イヴはアダムの肋骨から生まれ、アテナとバックスはそれぞれゼウスの頭と太股から生まれるが、シェイクスピア作品でも男性による出産はしばしばミソジニーと連動して想像される⁴⁵⁾。ソネット 18 番では男性詩人が詩行 ('lines' (l.12)) によって青年の血を引く子孫 ('lines of descent') を代替し、女性が介入しない再生産を実現しており⁴⁶⁾、『シンペリン』ではイ

は、妊娠・出産に関する特集の対象を 'men, trans / masculine, and non-binary people' と定義し、'transman' と 'transmasculine' の個別性と連続性の両方にふれている。本稿ではこうした用法の相違をふまえ各著者の記述をそのまま踏襲するため、表記にブレがあることを断っておく。'transmasculine, adj.', 'transman, n.', in *OED Online* <<https://www.oed.com/>> [accessed 3 February 2022]; Sari L. Reisner, Kristi E. Gamarel, Emilia Dunham, et. al., 'Female-to-Male Transmasculine Adult Health: A Mixed-Methods Community-Based Needs Assessment', *Journal of the American Psychiatric Nurses Association*, 19.5 (2013), 293-303; 'Trans Pregnancy: Fertility, Reproduction and Body Autonomy' (Editorial), *International Journal of Transgender Health*, 22.1-2 (2021), 1-5 <<https://doi.org/10.1080/26895269.2021.1884289>>.

44) 'Trans Pregnancy'; Simon Hattenstone, 'The Dad Who Gave Birth: "Being Pregnant Doesn't Change Me Being a Trans Man"', *Guardian*, 20 April 2019, <<https://www.theguardian.com/society/2019/apr/20/the-dad-who-gave-birth-pregnant-trans-freddy-mcconnell>> [accessed 3 February 2022].

45) Higginbotham and Johnston, pp. 17-18.

ノージェンの浮気を疑うポステュマスがこう述べている：‘Is there no way for men to be, but women / Must be half-workers?’ (2.5.1-2)⁴⁷⁾。

ミドルトンもラクタンシオと小姓^{ペイジ}の両方をセックスとジェンダーの流動性と結びつけることで、新しい形の妊娠・出産を想像しているようにみえる。二人の性交渉は衣服のイメージアリーを通じて、さまざまな性愛を横断するものとして語られるのである。小姓^{ペイジ}はラクタンシオと同衾した翌日、ドンドーロにラクタンシオのシャツを干すよう頼むが、ドンドーロはこのように反応する。

DONDOLO. Why, look, you whoreson coxcomb, this is a smock.

PAGE. No, 'tis my master's shirt.

DONDOLO. Why, that's true too ;

Who knows not that? Why, 'tis the fashion, fool.

All your young gallants here of late wear smocks,

Those without beards especially.

[. . .]

A young gallant lying abed with his wench, if the constable should chance to come up and search, being both in smocks, they'd be taken for sisters, and I hope a constable dare go no further. And as for the knowing of their heads, that's well enough too ; for I know many young gentlemen wear longer hair than their mistresses. (1.3.66-78)

46) William Shakespeare, *Shakespeare's Sonnets*, ed. by Katherine Duncan-Jones (London : Thomson Learning, 1997), pp. 146-47.

47) William Shakespeare, *Cymbeline*, ed. by Valerie Wayne (London : Bloomsbury, 2017).



図1 A man's shirt, 1600-50, made in Italy, museum number 139-1880. © Victoria and Albert Museum, London. Reproduced by permission.



図2 A woman's fine linen smock, 1620-40, made in England, museum number T. 243-1959. © Victoria and Albert Museum, London. Reproduced by permission.

ドンドーロは小姓^{ペイジ}の正体を知らないものの、主人であるラクタンシオと
 いやに親密だと疑っているため、小姓^{ペイジ}が渡したシャツ ('shirt') がスモック ('smock')
 かもしれないというのは、正体がばれたのではないかという緊張感を生む。しかしドンドーロはむしろラクタンシオがスモックを着
 けていてもおかしくない^と返答する。シャツは男性用、スモックは女性用の肌着だが、次の画像からは二つがよく似た形状とデザインだったことがわかる。

このように外見上は男女の区別がつきにくい肌着があったことは、本作上演の少し前、1620年に『おとこ女』と『おんな男』が出版されたことを考えると皮肉である。異性の衣服をまとう男女を揶揄した小冊子だが、表紙の木版画を見ると性別はそれほど曖昧に描かれていないことがわかる。女性は男性用の縁の広い帽子を被り、ピストル、剣、拍車を身につけているが、ベティコート^{ペティコート}を履いており、男性も台所で使うさじを持っているが、ホーズ^{ホーズ}を履いている。要するに、衣服はジェンダーを規定する力を完全には失っていないのである。



図3 Detail from the title page of Anon., *Hic Mulier: Or, The Man-Woman* (1620), call number 61256, The Huntington Library, San Marino, California. Reproduced by courtesy of the Huntington Library.



図4 Detail from the title page of Anon., *Haec-Vir: Or, The Womanish-Man* (1620), call number 61257, The Huntington Library, San Marino, California. Reproduced by courtesy of the Huntington Library.

一方、シャツとスモックの区別の曖昧さは、当時しばしば強調されたほどには衣服が性別の標しとして機能しなかったことを示唆する。たとえばステイーヴン・ゴッソンは『五つの訴えによる劇場批判』（1582）において、劇場における異性装の習慣をこのように糾弾している。

The Law of God very straightly forbids men to put on wome[n]s garments, garments are set downe for signes distinctiue betwene sexe & sexe, to take unto us those garments that are manifest signes of another sexe, is to falsifie, forge and adulterate, contrarie to the expresse rule of the words of God.⁴⁸⁾

ゴッソンにとって衣服は性別を区別するために神が人間に与えた重要な標しであり、同様の見解は『おとこ女』の作者によっても述べられてい

48) Steph[en] Gosson, *Playes Confuted in Fiue Actions* (London, [1582]), sig. E3^v.

る。

Remember how your Maker made for our first Parents coates, not one coat, but a coat for the man, and a coat for the woman ; coates of seuerall fashions, seuerall formes, and for seuerall vses : the mans coat fit for his labour, the womans fit for her modestie[.]⁴⁹⁾

しかし神が男と女に与えた「さまざまな流行、形状、用途の衣服」の中にはシャツとスモックのように性別が必ずしも明瞭でないものも含まれており、ラクタンシオと小姓^{ベイジ}のあいだに不定形の欲望を打ち立てている。まずラクタンシオは女性との婚外交渉がばれないようにスモックを着るため、これは異性愛的欲望といえる。次に彼は少年俳優が演じる小姓^{ベイジ}に男装させるので、男性への欲望もあるといえるだろう。一方、ラクタンシオにも髭がなく（‘without beards’）、頬を赤らめるなどの特徴があることをふまえれば、彼の身体はむしろスモックが示すとおり女性的でもあり、小姓との関係は女性間の同性愛に変容する。つまり二人の欲望にはさまざまな様相があり、すべてが同時に発生することから区別は難しく、異性愛的でありながら同性愛的でもあるようなクィアな性交渉が行われるのである。

ミドルトンは出産の場面でも小姓 | 妊婦 | 少年俳優の三つの層を横断することで、非=女性による出産を想像し、異性愛規範の要である再生産を解釈し直している。小姓^{ベイジ}は歌とダンスのレッスン中に陣痛を催すが、小姓^{ベイジ}を男らしくするはずの教育がむしろ陣痛を誘発し、女であることを明かしてしまうのは皮肉である。アマンダ・ウインクラーによれば、歌唱や楽器演奏などの音楽とダンスは紳士教育に必須とみなされ、グラマースクールでも教えられていたが、その重要な目的の一つに性役割の教育があった⁵⁰⁾。ジーナ・ブルームが述べるように、当時は力強く安定感のある成人

49) Anon., *Hic Mulier : Or, The Man-Woman* (London, 1620), sigs B2^v-B3^r.

50) Amanda Eubanks Winkler, *Music, Dance, and Drama in Early Modern English*

男性の声が理想とされ、女性のように甲高い少年の声はしばしば発声練習を通じて矯正された。たとえばマーチャント・テイラーズ・スクールとセント・ポール・スクールの校長を務め、セント・ポール少年劇団の活動再開にも尽力したとされるリチャード・マルキャスターは『子供の教育をめぐる [中略] 見解』(1581年)において‘vociferation’と呼ばれる古典的な発声練習を推奨している。

[The children] did first begin lowe, and moderatly, then went on to further straying, of their speeche : sometimes drawing it out, with as stayed, and graue soundes, as was possible, sometimes bringing it backe, to the sharpest and shrillest, that they could, afterward not tarying long in that shrill sound, they retired backe againe, slacking the straine of their voice, till they fell into that low, and moderate tenour, wherwith they first began.⁵¹⁾

本書の出版からはかなり長い年月が経っているが、『偽善者』でも小^{ベイジ}姓が類似の発声練習を行っている。歌の教師であるクロチェットの指導に従い、音階を次第に上げていくのである。

PAGE. Gam ut, A re, B mi, C fa, D sol –

CROTCHET. E la : aloft, above the clouds, my boy. (5.1.18-19)

同様にダンスも性役割を教え込むものとして重要な役割を与えられてい

Schools (Cambridge : Cambridge University Press, 2020), pp. 13-15.

51) Richard Mulcaster, *Positions VVherin Those Primitive Circvmstances Be Examined, Which Are Necessarie for the Training Vp of Children, Either for Skill in Their Booke, or Health in Their Bodie* (London, 1581), p. 58 ; Gina Bloom, *Voice in Motion : Staging Gender, Shaping Sound in Early Modern England* (Philadelphia : University of Pennsylvania Press, 2007), pp. 23-34.

た。ダンスには歩幅やステップなど性別によって異なる動きがあり、ウィンクラーの言葉を借りれば、「男性にふさわしい態度と自己統制」や「男女間の関係」を教えるのに役立つのである⁵²⁾。要するに特定のジェンダーに適切とされる発声や身体の動きを反復することで、ジェンダーがパフォーマンスに構築されたわけだが、小姓の歌とダンスはむしろ陣痛を引き起こし、これを攪乱する。ダンス教師のシンカペースはかたくなに股を閉じ続ける小姓をこう罵る：‘Open thy knees, wider, wider, wider! Did you ever see a boy dance clenched up?’ (5.1.190–91) 小姓が仕方なく股を開くと陣痛が加速するが、小姓がこうした身体的変化をかなり詳細に観客に伝えているのは注目に値する。

Would I'd an honest caudle next my heart!

Let whos' would 'sol fa'; I'd give them my part.

In troth, methinks I have a great longing in me

To bite a piece of the musician's nose off. (5.1.6–9、強調筆者)

コードルは穀物などを煮込み、砂糖やスパイスで味付けした温かい飲み物で、妊婦や病人の療養食だが、ここでは小姓の心臓の激しい動悸も示している⁵³⁾。鼻を嘔むというのは妊婦が奇妙なものを食べたがるという迷信であり、ベン・ジョンソン (Ben Jonson) の後期の喜劇『魅力的な貴婦人』 (*The Magnetic Lady*) には石炭、石灰、髪の毛、石鹸を食べる妊婦も登場する⁵⁴⁾。ほかにも小姓は腰痛 ('O, my back!' (5.1.14))、腹痛 ('O, my stomach!' (5.1.29))、めまい ('I'm even as full of qualms as heart can bear'

52) Winkler, p. 14.

53) 'caudle, n.', in *OED Online* <<https://www.oed.com/>> [accessed 3 February 2022].

54) Janelle Jenstad, "Smock-secrets": Birth and Women's Mysteries on the Early Modern Stage', in *Performing Maternity in Early Modern England*, ed. by Kathryn M. Moncrief and Kathryn R. McPherson (London: Routledge, 2007), pp. 87–99 (p. 87).

(5.1.57))などを訴えるが、こうした身体的言語は生々しく真に迫るものがあり、観客は演じているのが少年俳優だと知りながら、本当に出産するのではないかと緊張させられる。実際、小姓^{ペイジ}はあまりに苦しくて歌えないので、自分の声部('part')を放棄すると言うが、これを「役」と捉えれば、少年俳優が陣痛のために女を演じる余裕がなくなってきたと読み替えることも可能だろう。キャスリン・モンクリーフとキャスリン・マクファーソンが述べるように、少年俳優は妊婦を演じるさい、胸や腹部の膨らみを示す装具を用いたはずだが、それは言語を通じてみるみる妊婦の身体に変化するのである⁵⁵⁾。最後、小姓^{ペイジ}は卒倒する。

PAGE. A midwife, run for a midwife!
CINQUEPACE. A midwife? By this light, the boy's with the child!
A miracle! Some woman is the father. (5.1.222-24)

興味深いことに、シンカペースは異性装のヒロインが慣習化した時代にありながら、小姓^{ペイジ}は実は女性だったという自然な結論を口にしない。観客は、陣痛を起こしたのが小姓^{ペイジ}ではなく、それを演じる少年俳優なのではないかと一瞬、疑ったのではないだろうか。

また小姓^{ペイジ}の出産は、本作の上演に先駆けてジョン・ウェブスターの『モルフィ公爵夫人』が再演されたことをふまえても示唆的である。パスターが指摘したように、陣痛や出産が舞台で描かれることは極めて珍しく、『ペリクリーズ』(*Pericles*)や『冬物語』(*The Winter's Tale*)といったシェイクスピア作品でも舞台の外で起きた出来事として報告されるのみである⁵⁶⁾。一方、モルフィ公爵夫人と小姓^{ペイジ}はどちらも似たような状況におかれ、

55) Kathryn M. Moncrief and Kathryn R. McPherson, 'Embodied and Enacted: Performances of Maternity in Early Modern England', in *Performing Maternity*, pp. 1-13 (p. 6).

56) Paster, p. 163.

舞台上で陣痛を経験する。二人とも妊娠を隠す女性であり、小姓^{ベイジ}の陣痛が歌とダンスのレッスンによって誘発されるように、モルフィ公爵夫人はボゾラが与えたアプリコットを口にした瞬間、陣痛に苦しみ始める。『偽善者』と『モルフィ公爵夫人』はどちらも国王一座による上演だが、モルフィ公爵夫人を演じた少年俳優は、小姓^{ベイジ}役の少年俳優に演技指導をただろうか。モルフィ公爵夫人が主役であるのに対し、小姓^{ベイジ}が三番手の女性役であることをふまえると、その可能性は極めて高く、二人の少年俳優が陣痛や出産をめぐる会話をしたことは、女性たちがゴシップ (gossip) としてこうした知識を共有したことと重なる。ジョンソンの言葉を借りれば、「女だけの秘密」 ([s]mock-secrets' (4.7.41)) を通じて、少年俳優と女性の身体がここでも重なり合うのである⁵⁷⁾。

6. 結

本稿では、新しい家族の想像／創造、トランスジェンダー、物質文化という三つの批評的潮流を念頭に、『偽善者』におけるラクタンシオと小姓^{ベイジ}のカップルに注目し、二人の異性愛関係に介在するクィアな契機^{モーメント}＝瞬間をあきらかにした。ラクタンシオは優れた生殖能力を結婚ではなく非規範的な性交渉に費やすクィアな子供であり、小姓^{ベイジ}も性的に成熟した妊婦と未熟な少年の相反するジェンダーとセクシュアリティを身体化しているが、二人の性交渉は shirt | smock という衣装のイメージャリーを通じて、さまざまな性愛を横断するものとして表象される。また出産シーンにおいてもミドルトン⁵⁷⁾は小姓 | 妊婦 | 少年俳優の三つの層を横断することで、非＝女性による出産を想像しているようにみえる。

以上のように考えると、小姓^{ベイジ}の出産は異性愛規範を復活させるものでは

57) Ben Jonson, *The Magnetic Lady, or Humours Reconciled*, in *The Cambridge Edition of the Works of Ben Jonson*, ed. by David Bevington, Martin Butler, and Ian Donaldson, vol. 6 (Cambridge: Cambridge University Press, 2012), pp. 391-540.

なく、クィアな契機^{モーメント} = 瞬間を継承するものとして捉えられるのではないか。大団円において、小姓^{ベイジ}は女性の衣装に着替えた後、赤ん坊を抱いて登場する。ラクタンシオは結婚を受け入れ、小姓^{ベイジ}にこう尋ねる：‘Pray, what have you done with the breeches? We shall have need of ’em shortly. [...] My son and heir need not scorn to wear what his mother has left off (5.2. 249-53、強調筆者)。ラクタンシオは赤ん坊に「息子」と呼びかけているが、ジェンダーが流動化された両親から誕生し、母親のズボン(‘breeches’)を履く息子は、はたして「息子」であり続けるのだろうか。

参考文献

- Andrzejewski, Alicia, ‘The Then and There of Transmasculine Pregnancy’, *SYNOPSIS*, 10 June 2018, <<https://medicalhealthhumanities.com/2018/06/10/the-then-and-there-of-transmasculine-pregnancy/>> [accessed 2 February 2022].
- Anon., *Hic Mulier: Or, The Man-Woman: Being a Medicine to cure the Coltish Disease of the Staggers in the Masculine-Feminines of Our Times* (London, 1620).
- Blamires, Adrian, ‘Homoerotic Pleasure and Violence in the Drama of Thomas Middleton’, *Early Modern Literary Studies*, 16.2 (2012), 3 <<http://purl.org/emls/16-2/blammidd.htm>> [accessed 27 January 2022].
- Bloom, Gina, *Voice in Motion: Staging Gender, Shaping Sound in Early Modern England* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2007).
- Bray, Alan, *Homosexuality in Renaissance England*, 2nd edn (New York: Columbia University Press, 1995).
- Bromley, James M., *Clothing and Queer Style in Early Modern English Drama* (Oxford: Oxford University Press, 2021).
- Buccola, Regina, ‘“Some Woman is the Father”: Shakespeare, Middleton, and the Criss-Crossed Composition of *Measure for Measure* and *More Dissemblers Besides Women*’, *Medieval and Renaissance Drama in England*, 28 (2015), 86-109.
- Chess, Simone, ‘Asexuality, Queer Chastity, and Adolescence in Early Modern Literature’, in *Queering Childhood in Early Modern English Drama and Culture*, ed. by Jennifer Higginbotham and Mark Albert Johnston (Cham, Switzerland: Palgrave Macmillan, 2018), pp. 31-55.
- , ‘Contented Cuckolds: Infertility and Queer Reproductive Practice in Middleton’s *A Chaste Maid in Cheapside* and Machiavelli’s *Mandragola*’, in *Performing Disability in Early Modern English Drama*, ed. by Leslie C. Dunn (Cham, Switzerland: Palgrave Macmillan, 2020), pp. 117-40.

- , *Male-to-Female Crossdressing in Early Modern English Literature : Gender, Performance, and Queer Relations* (London : Routledge, 2016).
- Chess, Simone, Colby Gordon, Will Fisher, 'Introduction : Early Modern Trans Studies', *The Journal for Early Modern Cultural Studies*, 19.4 (2019), 1–25.
- DiGangi, Mario, *The Homoerotics of Early Modern Drama* (Cambridge : Cambridge University Press, 1997).
- Edelman, Lee, *No Future : Queer Theory and the Death Drive* (Durham : Duke University Press, 2004).
- Fisher, Will, *Materializing Gender in Early Modern English Literature and Culture* (Cambridge : Cambridge University Press, 2006).
- Geller, Lila, 'Widows' Vows and *More Dissemblers Besides Women*', *Medieval and Renaissance Drama in England*, 5 (1991), 287–308.
- Gosson, Steph[en], *Plays Confuted in Fiue Actions* (London, [1582]).
- Hattenstone, Simon, 'The Dad Who Gave Birth : "Being Pregnant Doesn't Change Me Being a Trans Man"', *Guardian*, 20 April 2019, <<https://www.theguardian.com/society/2019/apr/20/the-dad-who-gave-birth-pregnant-trans-freddy-mcconnell>> [accessed 3 February 2022].
- Higginbotham, Jennifer, and Mark Albert Johnston, 'Introduction : Queer(ing) Children and Childhood in Early Modern English Drama and Culture', in *Queering Childhood in Early Modern English Drama and Culture*, ed. by Jennifer Higginbotham and Mark Albert Johnston (Cham, Switzerland : Palgrave Macmillan, 2018), pp. 1–30.
- Jardine, Lisa, 'Twins and Travesties : Gender, Dependency and Sexual Availability in *Twelfth Night*', in *Erotic Politics : Desire on the Renaissance Stage*, ed. by Susan Zimmerman (London : Routledge, 1992), pp. 27–38.
- Jenstad, Janelle, "'Smock-secrets" : Birth and Women's Mysteries on the Early Modern Stage', in *Performing Maternity in Early Modern England*, ed. by Kathryn M. Moncrief and Kathryn R. McPherson (London : Routledge, 2007), pp. 87–99.
- Johnston, Mark Albert, 'Shakespeare's *Twelfth Night* and the Fertile Infertility of Eroticized Early Modern Boys', *Modern Philology*, 114.3 (2017), 573–600.
- Jones, Ann Rosalind, and Peter Stallybrass, *Renaissance Clothing and the Materials of Memory* (Cambridge : Cambridge University Press, 2000).
- Jonson, Ben, *The Magnetic Lady, or Humours Reconciled*, in *The Cambridge Edition of the Works of Ben Jonson*, ed. by David Bevington, Martin Butler, and Ian Donaldson, vol. 6 (Cambridge : Cambridge University Press, 2012), pp. 391–540.
- Jowett, John, 'More Dissemblers Besides Women', in *Thomas Middleton and Early Modern Contextual Culture : A Companion to the Collected Works*, ed. by Gary Taylor and John Lavagnino (Oxford : Clarendon Press, 2007), pp. 378–79.
- Kathman, David, 'Grocers, Goldsmiths, and Drapers : Freeman and Apprentices in the Elizabethan Theater', *Shakespeare Quarterly*, 55.1 (2004), 1–49.
- Knapp, James A., 'Beyond Materiality in Shakespeare Studies', *Literature*

- Compass*, 11.10 (2014), 677–90.
- Leinwand, Theodore B., 'Redeeming Beggary / Buggery in *Michaelmas Term*', *ELH*, 61.1 (1994), 53–70.
- Masten, Jeffrey, *Queer Philologies : Sex, Language, and Affect in Shakespeare's Time* (Philadelphia : University of Pennsylvania Press, 2016). Kindle.
- Menon, Madhavi, ed., *Shakespeare : A Queer Companion to the Complete Works of Shakespeare* (Durham : Duke University Press, 2011).
- Middleton, Thomas, *The Black Book*, ed. by G. B. Shand, in Thomas Middleton, *The Collected Works*, ed. by Gary Taylor and John Lavagnino (Oxford : Clarendon Press, 2007), pp. 204–18.
- , *A Chaste Maid in Cheapside*, ed. by R. B. Parker (London : Methuen, 1969).
- , *A Chaste Maid in Cheapside*, ed. by Linda Woodbridge, in Thomas Middleton, *The Collected Works*, ed. by Gary Taylor and John Lavagnino (Oxford : Clarendon Press, 2007), pp. 907–58.
- , *More Dissemblers Besides Women*, ed. by John Jowett, in Thomas Middleton, *The Collected Works*, ed. by Gary Taylor and John Lavagnino (Oxford : Clarendon Press, 2007), pp. 1034–73.
- , *Women, Beware Women : A Tragedy*, ed. by John Jowett, in Thomas Middleton, *The Collected Works*, ed. by Gary Taylor and John Lavagnino (Oxford : Clarendon Press, 2007), pp. 1488–1541.
- Moncrief, Kathryn M., and Kathryn R. McPherson, 'Embodied and Enacted : Performances of Maternity in Early Modern England', in *Performing Maternity in Early Modern England*, ed. by Kathryn M. Moncrief and Kathryn R. McPherson (London : Routledge, 2007), pp. 1–13.
- Moon, Michael, *A Small Boy and Others : Imitation and Initiation in American Culture from Henry James to Andy Warhol* (Durham : Duke University Press, 1998). Kindle.
- Mulcaster, Richard, *Positions VVherin Those Primitive Circvmtances Be Examined, Which Are Necessarie for the Training Vp of Children, Either for Skill in Their Booke, or Health in Their Bodie* (London, 1581).
- Orgel, Stephen, *Impersonations : The Performance of Gender in Shakespeare's England* (Cambridge : Cambridge University Press, 1996).
- Oxford English Dictionary Online* (Oxford University Press, 2016), <www.oed.com>.
- Paster, Gail Kern, *The Body Embarrassed : Drama and the Disciplines of Shame in Early Modern England* (New York : Cornell University Press, 1993).
- Patricia, Anthony Guy, ed., *Queering the Shakespeare Film : Gender Trouble, Gay Spectatorship, and Male Homoeroticism* (London : Bloomsbury, 2017).
- Rappaport, Steve, *Worlds within Worlds : Structures of Life in Sixteenth-Century London* (Cambridge : Cambridge University Press, 1989).
- Reisner, Sari L., Kristi E. Gamarel, Emilia Dunham, et. al., 'Female-to-Male Transmasculine Adult Health : A Mixed-Methods Community-Based Needs

- Assessment', *Journal of the American Psychiatric Nurses Association*, 19.5 (2013), 293-303.
- Rubright, Marjorie, 'Transgender Capacity in Thomas Dekker and Thomas Middleton's *The Roaring Girl* (1611)', *The Journal for Early Modern Cultural Studies*, 19.4 (2019), 45-74.
- Sanchez, Melissa E., ed., *Shakespeare and Queer Theory* (London : Bloomsbury, 2019).
- Sedgwick, Eve Kosofsky, *Tendencies* (Durham : Duke University Press, 1993).
- Shakespeare, William, *Cymbeline*, ed. by Valerie Wayne (London : Bloomsbury, 2017).
- , *Shakespeare's Sonnets*, ed. by Katherine Duncan-Jones (London : Thomson Learning, 1997).
- Sokol, B. J., and Mary Sokol, *Shakespeare, Law, and Marriage* (Cambridge : Cambridge University Press, 2003).
- Stanivukovic, Goran, ed., *Queer Shakespeare : Desire and Sexuality* (London : Bloomsbury, 2017).
- Stockton, Kathryn Bond, *The Queer Child : Or Growing Sideways in the Twentieth Century* (Durham : Duke University Press, 2009).
- Stryker, Susan, *Transgender History : The Roots of Today's Revolution*, revised edn. (New York : Seal Press, 2017).
- Taylor, Gary, 'Thomas Middleton : Lives and Afterlives', in Thomas Middleton, *The Collected Works*, ed. by Gary Taylor and John Lavagnino (Oxford : Clarendon Press, 2007), pp. 25-58.
- 'Trans Pregnancy : Fertility, Reproduction and Body Autonomy' (Editorial), *International Journal of Transgender Health*, 22. 1-2 (2021), 1-5 <<https://doi.org/10.1080/26895269.2021.1884289>>.
- Traub, Valerie, 'The (in) significance of "lesbian" Desire in Early Modern England', in *Erotic Politics : Desire on the Renaissance Stage*, ed. by Susan Zimmerman (London : Routledge, 1992), pp. 150-69.
- , *Thinking Sex with the Early Moderns* (Philadelphia : University of Pennsylvania Press, 2016).
- Tricomi, Albert H., 'Middleton's *Women Beware Women* as Anticourt Drama', *Modern Language Studies*, 19.2 (1989), 65-77.
- Wiggins, Martin, in association with Catherine Richardson, *British Drama 1533-1642 : A Catalogue*, 9 vols (Oxford : Oxford University Press, 2012-18).
- Winkler, Amanda Eubanks, *Music, Dance, and Drama in Early Modern English Schools* (Cambridge : Cambridge University Press, 2020).
- Zoch, Amanda, 'Maternal Revision in Middleton's *More Dissemblers Besides Women*', in *Stage Matters : Props, Bodies, and Space in Shakespearean Performance* (London : Fairleigh Dickinson University Press, 2018), pp. 159-70.
- サラ・サリー、『ジュディス・バトラー』、竹村和子他訳、青土社、2005年。
ジュディス・バトラー、『ジェンダー・トラブルーフェミニズムとアイデンティ

- テイの攪乱』、竹村和子訳、青土社、2017年。
- 、『問題=物質となる身体—「セックス」の言説的境界について』、佐藤嘉幸監訳、竹村和子・越智博美ほか訳、以文社、2021年。